

らない。これは病理解剖が一般にとって、さほど珍しいものでもなくなつた事、他に新聞記事の材料が多くなつたこと等に起因すると思われる。

医学関係の見学者が多いのもこの時期の特徴で、少なくとも十名内外、時には三十名を超えている。見学者は開業医が多い。

病理解剖全八例を日時、執刀者、助手、立会人、見学者、剖検所見、被剖検者名および職業、年令、解剖動機等を一覧表にして、各例について説明を加えた。

病名は結核四、肝臓病二、梅毒一、その他一で顕微鏡検査を行つたのは一例にすぎないが、当時の医師たちの熱気が身近に感じられる。  
(平成元年三月例会)

## ◇◇◇◇◇ 紹介 ◇◇◇◇◇

谷口克著『免疫の闘い』

我々の体は、生体活動を停止すれば数時間のうちに腐敗が進行し異臭を放つようになる。生命活動を効率よくすればするほど、我々の体はどの微生物にとつても魅力的な培地になってしまう。生きていくことの証が感染防御である。ひとたび侵入した微生物に対していかん効果的に対応するかという明確な目的を持って、免疫系のネットワークは成立している。たんにエネルギーの高い標的細胞傷害性を有してもその制御が乱れてしまえば、とくに自

己組織に対して取り返しのない傷害を与えてしまうパラドキシカルな現象も起きてしまう。

消化、吸収、異化と並んで、免疫現象とは古代人が小宇宙にたとえた我々の生体の存在を支える重要な柱である。本書『免疫の闘い』はこのような視点から、最近とくに一般の人々の間で関心の高まりつつある、癌、エイズ・ウイルスと免疫現象の関わりを、やさしく極力専門用語を使わずに解説してくれている。

免疫現象によって我々の生命は支えられていても、その対象となるウイルスや細菌、ましてやそれらに対する抗体を目にするとはできない。そのため、つい机上の空論・書生談風になつてしまふ免疫現象を、エイズや癌といった身近に迫りつつある事例に合わせ、ここ二〇年間の莫大なこの分野の進歩を取り入れ解説している。常に免疫学の第一線にいる著者であつてこそはじめて可能な著作といえよう。

免疫学と他の生物学との決定的な違いは、免疫学が治療学として出発し学として確立された後にも疾患の治療を目指していることであろう。本書の題にある闘いはこれを意味する。免疫現象はジェンナーやパスツールによってその現象としての解析を待たずして治療に応用され実績をあげ、その後、北里、ペーリングらによって血清学としての基礎が少しずつ形作られていったものである。この間の事情も本書にわかり易く解説されている。

またエイズなどのウイルス感染症が社会問題化するにつれ、いままで一般の人々には聞きなれないT細胞、B細胞、マクロファージ、抗体などという本来専門用語であるべき術語までが一般の

新聞、雑誌に登場するに至った。おそらく、それらの記事に触れてある断片的な解説に多くの読者はとまどったことであろう。これらの免疫問題をわかり易く解説しつつ、免疫という、ともするとわかりづらい分野を解説してくれているのも本書の特長といえるよう。

著者の谷口克千葉大学教授は昭和五十二年にエルウィン・フォン・ベルツ賞を受賞した日本を代表する免疫学者である。

(丁 宗鉄)

〔読売新聞社 読売科学選書一五 一九八七年 B五判  
二二七頁 一、二〇〇円〕

### 湯浅光朝編著『コンサイス科学年表』

本書は湯浅光朝氏が九年の歳月をかけて編刊した、世界の科学技術に関する年表である。

編著者は東京大学物理学科を卒業、神戸大学教授・専修大学教授を歴任、現在神戸大学名誉教授。昭和四十四年から五十六年まで日本科学史学会の会長を務められた斯界の碩学である。

本書は大別すると次のA～Dの四つの部分から構成される。

- A 解説年表
- B 詳細年表
- C テーマ別年表
- D 索引

Aの解説年表はさらに、①日本、②西洋、③アジア・アフリカ等の三分野に分けられ、それぞれ解説と年表の部分より成っている。これら解説年表は古代より二十世紀に至る全年域を網羅したもので、年表部分においては、①②は「科学」「技術」「思想」「社会文化」「参考事項」の五欄より、③は「中国」「朝鮮」「日本」「アジア・アフリカ等」「西洋」の五欄より構成される。また解説部分においては、①は「日本における科学の源泉」「江戸時代の科学」「近代科学の移植」「戦時における科学技術」「第二次大戦後の科学技術」、②は「空間の探求」「科学者ニュートン」「物質観の確立」「科学的繁栄の中心の移動」「二十世紀の大発明」、③は「中国の科学」「インドの科学」「アラビアの科学」の各項目について記されている。

Bの詳細年表は十五世紀以降、すなわち一四〇一年～一九八五年までの文字通り詳細な年表である。見開きに左頁に日本を、右頁に外国を配し、おのおの科学(数学・物理学・化学・生物学・天文学・地学・その他)・技術(機械・電気・交通・建設・鉱山冶金・応用化学・その他)・軍事・農学・医学の順に事項が記してある。さらに「参考事項」の欄も設けて一般歴史事項を記し、世界情勢が一目でわかるよう配慮してある。編著者もいのように、この詳細年表の部分が本書の主体を成すものであろう。

Cのテーマ別年表は、①基礎科学、②大技術の二つの年表に分かれ、①は数学・物理学・化学・元素の発見・生物学・天文学・地学・医学、②はコンピュータ、原子力、有線通信・無線通信、鉄道・航海・航空の各項目より成る。①に典拠文献が明記されて

いることは注目すべきである。

Dの索引は「日本人名」「日本事項」「アジア・アフリカ等事項」「アジア・アフリカ等人名」「西洋事項」「原綴西洋人名」「西洋人名」の部分より成り、人名については簡潔な人名事典を兼ねている。

本書は縦・横あらゆる面から立体的に構成された科学・技術の年表・事典である。その広範かつ綿密さは、まさに編著者ならではのライフワークといえよう。是非とも本学会諸氏の座右に据えられるようお勧めしたい。

(小曾戸 洋)

〔三省堂 一九八八年 B六変型判 七六〇頁 三、六〇〇円〕

### 高島文一著『鍼灸医学序説』

昨年の六月に日本医史学会から表題の著書についての紹介の依頼を受けた。著者は小生の関係する日本経絡学会の学術大会で発表をいただいたりもしているので、ご紹介できればとお引き受けした。ところが、お引き受けしてからすでに一年近くになってしまったのには、いささかの経緯があるので、最初にそのことをお断りしておきたいと思う。

紹介しようと思ってこの本を読ませていただいたところが、読むほどにその内容に疑点が生じ、紹介する意欲を喪失してしまつたのである。一度お引き受けしておきながら、お断りするのは誠

に失礼かと思つたが、良心に恥じることができずに、その旨お伝えしたところ、重ねて紹介のご依頼があり、ここに若干の文をしたためるはめになってしまつた次第である。

高島文一氏の著書を詳しく読むほどに、著書の中から問題点を拾い出したらきりがないので、いくつかの指摘に止めたい。

(一) 著書に引用する『経絡』図(一〇五―一八頁)は中国・北京中医学院篇『中医学基礎』(一九七八年刊、ただし著書中の参考文献では、上海中医学院編となつてゐる)の図を、たんに頭髮を塗り替えただけで作成している。しかも、その原図の出典をまったく明らかにしていない。

(二) 第四部弁証施治の中の第四節「切診」で(イ)部位を述べているが次のようにいう。「漢代以前は、人迎(頸動脈の分岐点)・寸口(橈骨動脈)・跌陽(足背動脈)の三カ所で脈診して三部診法といつたが、現在では寸口診法のみが用いられている。」これは前出の『中医学基礎』の脈診的部位(八七頁)の翻訳と見られるが、原文では「素問の中に頭、手、足を包括している『遍身法』があり、漢代の張仲景が『傷寒論』の中で人迎・寸口・跌陽を包括して三部診法としている。」と述べている。しかもこの部分の記述が不正確と見られていたのであらう、後で述べる『中医診断学』では診断の部位は次のようにはっきりと三つに分け「(一)遍身法、(二)三部診法、(三)寸口診法」と改正している。

しかし、古典における脈診の方法を少し調べれば、素問における寸口診・三部九候診・人迎脈口診の併記、靈樞における人迎脈口診法の主張、難経での寸口診宣言等があることは自明である。

しかも現在の日本の古典派といわれる流派での脈診が「六部定位診脈法」と呼称されていることも無視してはならないと思う。

(三)『鍼灸医学序説』といえながら、治療法は『中医学基礎』の第七章の治則を翻訳しただけで、治療法についての鍼灸に関係することにはいっさい言及せず、すべて漢方薬の処方に終始しているのはいっさいどういふことなのであろうか。まったく理解に苦しむところである。

日本の鍼灸関係者は、この二十〜三十年來、どのようにして古典に立脚した鍼灸医学を確立し得るか、日夜努力している。それに引き換え、氏のこのたびの著作はあまりに安易すぎるように思われる。

まして、中国の関係者がこの著作を読まれたら、日本の、しかも鍼灸大学の教授の著作が、すでに克服した『旧・中医学基礎』をもとにして、それも誤訳が随所であり、その後大改定した『中医学基礎理論』および『中医診断学』を参考にもしていないとなれば、どのような印象をもたれるであらうか。

『中医学基礎』(全国高等医薬院校試用教材)は一九八二年十月に南京で開かれた全国高等中医薬院校教材編集会議で大改訂の方針が決まり、一九八四年五月に『中医基礎理論』と改称して出版されている。『中医学基礎』の中に含まれていた診断学は独立して『中医診断学』となり、一九八四年十一月に出版されている。

著者は序文に「最近中国との交流が激しくなり、新しい中医学がどんどん流入して来ている。これと日本式のものとの間に一部

混乱を生じてきているものもある。この点の解明にも努めたつもりである。」といわれている。まさに著者のいわれるとおりであるが、いったいこの著書のどの部分で解明に努められているのであろうか、理解に苦しむところである。

いささか苦言のみ呈してしまったが、ことは日中の鍼灸医学の将来に重要な影響のある問題と考え、敢えて記した次第である。

(島田 隆司)

「思文閣出版 一九八八年四月 A五判 二六六頁 二、八〇〇円」

#### 赤堀昭著『漢方薬』

本書は日本産業技術史学会の監修による(日本の技術)シリーズ第一期配本分として『産業技術を描く』『鉄の百年 八幡製鉄所』『日本酒』『ロータリーエンジン』とともに刊行された。本書の著者は本学会評議員であり、製薬会社の研究開発部長として製剤技術の研究に従事し、「柴胡桂枝湯の煎液とエキス中の Salicospinin, Baicalin, Cinnamic Aldehyde と Cinnamic Acid の量」『桃仁・杏仁および桃仁配合剤中のアミグダリンの酵素加水分解』などの論文が本書中にも引用されている。

本書の序章には「漢方薬とは漢方で使っている薬である。といふと何となくわかったような気がするが、実は漢方薬については人によってかなり受け取り方に違いがあり、問題はそれほど簡単ではない」、「この書では漢方薬の定義もできるだけ広くとって、

漢方医が投薬するものを中心にするけれども、その原料になる生薬や、それを起源にした売薬の類も含めることにしたい」とあり、日本における漢方だけでなく中医学も含め、その使用する処方と原料生薬・民間伝統薬の歴史と技術についてまとめられている。

本文は四章よりなり、第一章「中国における漢方医学の進展」は殷・周時代の漢方医学の発生から二十世紀の中西医合作までを時代的な背景をも含めた歴史、第二章「日本における漢方の進展」は奈良時代の中国医学の導入から明治以降、近年までの状況と、現在の日本漢方と中医学の違い、第三章「漢方薬の変遷」は、前半を生薬の時代・地域による変化と栽培・修治、後半は漢方製剤を散・丸・膏・丹・湯・エキス剤に分け歴史と現状、第四章「漢方薬の問題点と将来」は最新の研究成果を引用して漢方薬の均質性などについて論述している。

あとがきに「平生私がなじんんでいる中国古代の医薬学史と現在の薬品の問題点についての記述が詳しくなり、途中の部分について充分に書き尽くせなかった。何回読み返しても不満な点が目につく作品であるが、この際むしろ本書を漢方薬についての私なりの問題提起として世に問うことにしたい」とあるが、本書はどの項目においても多数の写真や図・表・引用文献などの資料をまじえ詳細な解説を加えている。とくに巻頭の「漢方エキス剤の製造法」のカラー写真は企業秘密などの問題で通常見ることのできない工場内部の機械まで掲載している。

以上本書は、漢方医学の歴史とそれに伴う漢方薬・製剤技術の

歴史、今後の問題点について筆者の研究成果を加えてわかりやすく記載しており、医学・薬学以外の分野の技術者にも一読をお勧めしたい。

(岩浪 登)

〔第一法規出版 一九八八年 B五判 一一〇頁 二、二〇〇円〕

佐久間温巳著

『西尾市民病院物語―市民医療の未来に向けて―』

愛知県西尾市の市民病院について、同病院の副院長兼外科医長の病院史であり、未来展望の報告書である。一つの市立病院の歴史を一番良く知り得る立場の著者が執筆し、その地域の風琳堂という、いわば地方小出版社から販売されたのである。

この間の事情について著者は「あとがき」で「自分の力で、自分の考え方で、正確な病院史を書く」ことを企画したと述べている。また、この著作がいまの時点で出版されるのは、病院の移転新築が決定され、実現に向っている時期なので、過去をふりかえり、未来への提言をする意味をもつということである。

いわゆる市民病院という名の公立病院ができてきた経過に興味をもち、本書を読んだ。戦時統制時代に戦力増強の一貫として、昭和十七年の国会で国民医療法が成立し、日本医療団が設立された。これにより愛知県西尾町の私立勝沼病院を買収し、翌十九年二月二十九日に日本医療団西尾奨健寮が開院した。戦時統制から

終戦処理の時代変遷における地域医療史のモデルともいえよう。

また、昭和二十三年に西尾町が買取り、町立西尾地方病院として発足し、現在の西尾市民病院に発展した。その間の消息を、院長で時代区分し、著者の綿密な追跡調査がなされた。

二代院長時代（昭和二十五―三十六年）は「狂乱怒濤の時代」「ワンマン院長の無理矢理第一期発展時代」と定義し、機関による病院史では取り上げられない追求がなされ、客観的な事実を冷静な筆致で述べられ、成功していると思われる。資料編の年表によれば、昭和二十八年に西尾町は市制施行となったが、市財政赤字のため三十一年に財政再建団体に指定され、三十年の全市の国保実施、三十二年に全国医師会が国保改悪反対の決起大会という波乱の時であった。思想的にも安保闘争で国内は大揺れに揺れた。

医療技術の面からは医専がこの頃に終りを告げ、大学卒業生のみの時代になっていた。医療も近代から現代に発展したのである。著者はすでに現代の進んだ医療技術を学び、しかも西尾市民病院で公立病院における心臓内手術の最初の成功という、外科医療の最先端を行く指導者であるから、市民病院史の上での医療の近代から現代への変化の記述を避けたのであろう。

現在の中村宗平院長は第六代にあたる。それぞれの院長活躍の足跡は社会史であり、医療は其中でゆれ動いているようでありながら市民の中にしっかりと根をおろしていた。それらを著者の確実な眼がとらえ、筆力が表現する。

本書は、西尾市民病院前史、西尾市民病院のあゆみ、未来へむ

けて、資料編の四編で構成されている。資料編の年表も興味深い。

私たちは開業医に接することが多い。その上で市民病院は市民のための病院として存在する。本書は、市民に開かれた病院のあり方を示し、新しい市民病院建築の精神高揚を伝えている。正しい医療を前進させ、明るい環境づくりに貢献する姿勢を、心ある西尾市民をはじめとする多くの人々に読まれることを期待する。

（丸山 知良）

〔ゆりな編集センター発行 風琳堂販売 一九八八年六月〕

四六判 四四六頁 二、八〇〇円〕

#### 復刻版『一四年目の訪問』

―森永ひ素ミルク中毒追跡調査の記録―

本書は、昭和三十年六月から三十一年にかけて、岡山県を中心とする西日本に発生した、森永ドライミルクへの砒素混入による中毒被害者に対する、昭和四十四年以後の追跡調査記録を復刻したものである。すなわち、本件については、昭和三十八年に徳島地裁において森永側の無罪判決（第一審）が出ており、四十一年には高松高裁で一審判決が破棄され地裁への差戻しとなったが、森永側が最高裁へ上告。四十四年二月に最高裁が上告を却下し徳島地裁への差戻しが確定した。

四十四年五月から本書の記録が示す、阪大医学部衛生学教授丸

山博氏を中心とする、養護教員、保健婦、医学生による訪問調査が行われ、その成果は第二七回日本公衆衛生学会(岡山)において発表され、大きな社会的反響を呼んだ。そして、この調査は、日本公衆衛生学会や日本衛生学会が森永問題の疫学調査や対策に取り組み契機となったし、「森永ミルク中毒のこどもを守る会」が全国的に結成されるにあたって、大きなインパクトを与えた。

森永ミルク中毒対策は、金銭的補償という枠を越えて、子供たちの発達、自立を保障するという恒久対策の道を開拓した点で、薬害や食品公害の事後対策に新たな段階をもたらした。

本書は、この調査から、「守る会」の結成、そして恒久対策の道の追求までを反映する原資料や論文が収められている。本書は三部から構成され、第一部が、ガリ版制りの「一四年目の訪問」を印刷したものであり、六八例の訪問事例報告である。生々しい事実との出会い、掘り起し、そして訪問者の側の驚きと怒りが、淡々とした記述から伝わってくる。

第二部は、「一四年目の訪問に取り組んで」という題のもとに、訪問関係者が、『保健婦雑誌』や『医学のあゆみ』等に発表した論文等が収録されている。ここでは、第一部の素材が、より深く考察・分析されているし、また、「守る会」や、救済対策事業を行う「ひかり協会」(初代会長曾田長宗氏)の結成への歩みが述べられている。第二部末尾の「森永と素ミルク中毒事件関係年表」は詳細なもので、全体の動きを概観する上で有用である。第三部は、「ひろがる波紋」という題で、大阪府職労や、大阪府森永ミ

ルク中毒対策会議など運動団体の機関紙の複製である。一四年目の訪問を行った保健婦や養護教員たちを、労働組合が組織的にバックアップして大きな運動に成長させていった経過を知ることができる。

本書は、世界にも例のない、乳児の主食であるミルクによる砒素中毒の発端から「終息」、再発見そして恒久対策への全経過を記録した貴重な歴史的証言である。

〔森永ミルク中毒事後調査の会編 せせらぎ出版 一九八八年  
B五判 二四六頁 一、二〇〇円〕  
(日野・秀逸)

J・リュフィエ、J・C・スールニア著 仲澤紀雄訳  
『ペストからエイズまで—人間史における疫病—』

本書はこれまでの疾病史と若干異なり、遺伝生物学的観点から人類疾病史を論じたユニークな書である。著者の一人リュフィエは遺伝性血液病の専門家で、欧州・アフリカの溶血性貧血の地理分布はマラリアの蔓延と関連しており、抵抗性の強い遺伝子をもつ人々が選択された結果であることを明らかにした人である。本書ではまず人間集団を生態学的地位(ニッチ)という概念で捉え、居住空間における淘汰と進化と選択をくり返して今日に至ったとしている。はじめ人類は地理気象学的に住みにくい条件で他生物との不利な闘争を避けていた。やがて住居の確保、家畜の飼

育、食品の確保、保存、調理を覚え、文化的適応により他生物からぬげ出し強い生存権を地上で確保した。この文化的適応は教育、習熟で伝承できたが、DNAレベルでプログラムされていないので、ちょっとしたことで失われ易く、失われればまたやり直しをせざるを得ない歴史がくり返された。こうして生活圏を拡大した人間集団の前に立ちふさがったのが伝染病であり、いとも容易に既成の文化を破壊したのである。ギリシア時代の悪疫（いわゆるペスト）から、ローマ時代、中世の黒死病は、忘れた頃に大流行し、おびたしい人命を奪い、生活の秩序をこわし、文化の発展を頓座させた。癩、チフス、赤痢、結核の蔓延も長期間にわたり、人間集団に淘汰と選択をよぎなくし、人類の疾病感受性を少しずつ変化させた。限られた空間での特異的な地方病も蔓延し、地域特有の疾病要因も形成された。

近世に入り伝染性患者の隔離、病毒の遮断という知識が伝達され、さらに病原体の発見、ワクチンの導入、化学療法剤や抗生剤の登場、普及により、ようやく伝染病を克服できたかみえた。しかし世界各地には局地的に病毒が残存しており、エボラやラッサ熱のように、すぎがあれば文明社会へ侵入してくる。最近流行し始めたエイズは世界的拡がりを示し、人類の伝染病征圧への夢を一挙に打砕いた感がある。特異的な性生活と結びついた流行であるだけに、神罰とか世紀末的な感じを与えた。疾病概念の変遷についても展望し、文化の変化が病を克服した反面、新しい病を生むという現象にも着目している。つまりどの時代も人は相変わらず脆いので、つねに適応力や防禦法を更新せねばならないわけ

ある。病に直面した人の心理や行動の歴史的な展望も見事である。現代医学は治療から予防に向っているが、さらに予知医学の発展を求めている。

人の死はプログラムされているので度外れの寿命は考えられず、環境とのより良い均衡に向うべきとしている。つまり一定の保護と自由が尊重される柔軟な秩序ある社会で、不安と孤独の少ない調和のとれた生活環境を目ざすべきであるというのである。

内容の面白さにつられ、書評というより紹介が主体となったが、読者一人一人が読み、考え、共感し、疑って、人類、個人というものを見つめ直す書でもある。

医学、生物関係者のみならず、歴史、哲学、人文関係者も必読の書であり、広く一般にもお薦めしたい。

（青木 国雄）

〔国文社 一九八八年 A五判 三一六頁 三、〇〇〇円〕

瀧川義一、佐藤卓爾

『木村兼葭堂資料集―校訂と解説―』

木村兼葭堂（一七三六―一八一〇）は崎人である。当然、伴蒿蹊の著わす『近世崎人傳』にその伝記があると思うのだが、彼と親しい柳澤淇園、池大雅などの記事があるが彼の項はない。ただ売茶翁の項に売茶翁の所蔵した茶具八品が兼葭堂の所蔵となり、そのすべてを五ページを費して図示してあるのみである。



なるほど兼葭堂には人を驚かすような奇行はないし、変人と思われる性質もなかった。穩健篤実そのものであった。しかし江戸往復のさい大坂を通過する著名の学問好きの大名、国学者、漢学者、蘭学者、文学者、医者、本草家、物産家、愛書家は必ず彼を尋ねるのである。または彼がそれらの人を宿に尋ねるのである。そして彼の残した明和八年から死に至るまで書きしるしたいいわゆる『兼葭堂日記』は彼の会った人物名を克明に記しているという点から見ても畸人の資格十分とみられるのである。

これらの人は彼の人柄に引かれたが、また彼の蔵書、収集品にも魅せられたのである。彼を訪れば彼との対談中、彼に仕える多弁の妻と寡黙の妾とが客のために書物や収集品を出し入れするのである。

兼葭堂はとくに幼い時から植物を愛し本草を好む町人ナチュラリストだが、しかし詩をつくり絵を画き、人文的物品も研究し、あらゆるものに好奇心をもつて集めるので真に文字通り博物学者である。

このたび瀧川氏の発表された兼葭堂の資料によってもこの畸人の片鱗をうかがうことができよう。瀧川氏は自身の卒業論文のテーマに取り上げて以来の兼葭堂の研究者で、昭和六十年には『木村兼葭堂の蘭学志向―(一) 語学・本草学を中心に―』(科学書院)を出版しておられる。佐藤氏は国学院大学を出られた芝浦工業大学柏高等学校に勤める日本史専攻の方である。

本書は資料として『兼葭堂雑誌』『兼葭堂魚譜』『珍魚図』の三本と『書翰類』(一)をあげ、これに校訂と解説を付したもので

ある。兼葭堂の手記を写真で示し、それを活字化した文をのせ、それに関連した他書から借りた図も入れて解説して内容をわかりやすく説明している。

晁鐘成がすでに『兼葭堂雑録』五巻を編集し、安政六年(一八五九)に兼葭堂の自伝を付して出版した。それに残されたものが『兼葭堂雑誌』としてまとめられている。内容は雑多で科挙の話や道具類や看板、引札、山田仁左衛門の伝記やさるまわしの話、長白山の紹介、そして動植物の記事も多い。『魚譜』は一五種の魚について、『珍魚』には海亀、海獣、カニ、エビの類も入り植物も三種まじり、二五項がある。いずれも図がある。『書翰類』は約六〇通、小石元俊、松浦静山、小野蘭山、朽木昌綱、柴野栗山などとの手紙が注目される。年譜、人名索引、書名索引がある。続刊を待ちのぞむ。

〔蒼士舎 一九八八年 B五判 二九三頁 九、〇〇〇円〕

(木村陽二郎)

#### ルイス・バカイ著 古和田正悦訳 『開頭術の起源と発展』

この『開頭術の起源と発展』(古和田正悦教授・秋田大学医学部脳神経外科・訳)の原語の題は、An early history of craniotomyで古代からナポレオン時代までという副題がついている。著者のルイス・バカイはバッファローのニューヨーク州立大学医学部、

脳神経外科教授で、この本は一九八五年にチャールズ・C・トーマス出版社から初版が発刊された。

著者のルイス・バカイ教授の最近の論文には脳神経外科の歴史に関するものが多くみられるが、「過去を熟考しなければ、誰も現在を凝視したり、未来を洞察することはできない」と著者は現代医学において歴史を振り返ることの重要性を本書の日本語版への序文の最初に述べている。

著者はこの本を書いた意図について、近代の脳神経外科は、ハーベイ・クッシングによって正当な専門分野に創製されたといわれるが、脳神経外科も他の学問と同様、何世代にもわたって幾多の誤りを犯しながら、発展してきたものであり、この問題に関する過去の幾つかの著書では、その詳細に欠けることの多い一八〇〇年以前の歴史についてのギャップを埋めようと試みたと説明している。

第一章では開頭術の変遷など一般的なことが述べられ、第二章で重要な脳の解剖と機能に関する考え方の歴史に触れている。有史以前から行われ、現代にまで通じている開頭術がなぜ行われてきたのかという理由がおぼろげに理解できる。

第三章には開頭術に用いられた種々の手術器具について述べられているが、電動式のドリルが開発されるまで用いられた、われわれにもなじみの深い、ハンドルがコの字型の穿頭器の原形は一五〇〇年代のカルピヤパレにそのルーツを求めることができ

る。第四章以降は、ある時代、ある国、その時代に生きた各外科医師がたちの脳神経外科に対する考え方と行われた手術の内容など

が、豊富な資料に基づいて次々に紹介されている。古代ペルー人の穿頭術にはじまり、ヒポクラテス、ガレヌス、ペレンダリオ・ダ・カルピ、アンブロアズ・パレ、ドミニク・ジャン・ラレー、ファブリチウス・アブ・アクアペンデンテ、スケルテトス、ローレンツ・ハイステル等々、医学あるいは外科学の歴史に忘れることのできない医師たちの名前がつきつきに挙げられ、開頭術に示した興味と業績が述べられている。これを読んでいると、外科学は脳神経外科から始まったのではないかとさえ感じるほど、それぞれの時代に生きた偉大な医師たちの脳神経の病態に対する関心の深さに驚かされる。

第一章以降は脳の疾患について書かれているが、全体が一六の参考文献をあげ、多面的に脳神経外科の歴史を振り返っている点で、本書は医学史に興味を持つ人のみならず、現在の脳神経外科医にとっても必読の書といえよう。

(山本 修三)

〔西村書店 一九八八年 A五判 一六六頁 三、〇〇〇円〕

厚生省五十年史編集委員会編

『厚生省五十年史』

本書を見て、まぎびくりしたの記述編と資料編の二冊ともあまりにも大きく、立派なものであったからである。この大きさならさぞかし内容は充実したものであろうと期待していたが、読むにつれその期待は少しずつ失望に変わっていった。この失望の

原因は『厚生省二十年史』の編集方針を踏襲し、主題ごとの強弱もなく、まんべんなくふれ新しい企画が少なかったことによる。

厚生省前史として約七〇年間にわたるわが国の近代化のなかの衛生行政に触れているが、救貧、労働、社会保険を含んでいるので、広く浅く知るのに好都合である。

厚生省史の周辺をさぐると、興味のあるところは一五年戦争下と占領下である。

『厚生省五十年史』とあるからには、厚生省の創設前後に多くの資料を用い記述され、のちのちの研究に便利であろうと考えていたが、実際は『厚生省二十年史』に加えて、私の執筆した『続公衆衛生の発達』より多くを引用している。そのため、ここは他の章と構成が異なっている。

この引用の仕方木戸幸一関係のものはあたかもはじめてのようになっている。政府の刊行物には時々このような例が見られるが、文献の引用は研究書だけにとどまらず、この種の書物にも厳密性が求められる。ついでに触れておくが、巻末の参考文献一覧は著者名のないものがあるばかりでなく、すべてに発行年がないという初歩的ミスをおかしている。

厚生省の創設を求めた時代背景の新しい記述が十分になされていないのは惜しまれる。

本書で占領下の衛生行政がGHQの指導で行われていたことが、日本側から多方面にわたり記されている。現在、GHQの保健衛生関連の文書が公開されているという話しは聞いていないが、もし公開されれば一つの政策の見方をお互いに対比させ、

その時さらに深い知見の現れることが期待できる。どうしてもGHQの文書を見なければ、占領下の衛生行政の理解は完全でない。

高度経済成長期と高齢化時代の厚生行政の二編で本書の半分強のページ数を占めている。これは戦争のない時代の厚生行政が国民生活のなかで占めるウェイトが大きいことを反映しているからであろう。これに加えて資料も豊富で書き易かったことも無関係ではないであろう。

資料編のなかで『二十年史』に見られなかった「審議会・私的諮問機関等の活動状況」はたいへん役立つ企画である。資料編の約五〇〇ページは総合年表で、よくまとまっているので、できれば別冊になり索引があれば利用するのに便利であろう。惜しまれる。

記述編、資料編ともに物理的に大き過ぎる点が利用者にとって困る。

書評をしてみても、このような書をどのように評価すればいいのか、研究書ではないことはもちろん、だからといって通史とすることも無理があるように思う。評価の方法は立場によって異なるが、いずれにしても将来の厚生行政を考えるうえでゆっくり時間をかけて読んでみるものであろう。

(清水 勝嘉)

『厚生省五十年史編集委員会編 財団法人厚生問題研究会

一九八八年 B 五判 記述編二、〇八〇頁・資料編一、五〇〇頁

三〇、〇〇〇円]

川上武、小坂富美子著

『農村医学からメデイコ・ポリス構想へ』

—若月俊一の精神史—

草深い長野県佐久地方にあって、四〇年余にわたり農民、ともに医療活動を続け、いまや農村医学のメッカといわれるに至った佐久総合病院については、いままら多言を要しない。本書は、その奇跡的な発展と地域とのぬぎがたい結びつきの中に農村再生の手がかりを見つけようとするものであり、同時に、佐久病院の今日を築き上げた若月俊一院長の稀有なる資質にスポットを当てながら、その医療姿勢に学ぼうとする内容となっている。

高齢化の進む農村の危機的情況のなか、著者らはまず、一昨年の四全総試算を、たんに東京一極集中批判をかわすためのものにすぎないと断じ、また逆に農村、農業の枠内からの発想だけでも農村の再生はできないと批判する。企業誘致、シルバレーレッジ、リゾート構想などに地域の活性化を求めている例も少なくないが、農村再生に向けての第一の基本条件は医療・福祉システムの整備であり、なかでも医療を地域振興の軸とする対策が不可欠であるという。このような視点から生まれたものが著者らのユニークな「メデイコ・ポリス構想」である。その裏づけの一つとして、すでに規模、内容ともに地域医療の頂点に達した観すらある佐久病院の多大な影響力を医療機関の地域経済に対する波及効果の面で分析、農村再生のモデルを提供するものと評価している。しかしながら、さらに重要なことはその内容である。高度医療から保健予

防活動、今日の老人対策に至るまで、理論的にも、実践的にも、しっかりと地域に根づいたこの大型病院の真摯なあり方である。

むろん肥大化した佐久病院の今後に関して、著者らはとくに若い医師の意識を中心に適切な批判を忘れてはいない。が、それはそれとして、これからの病院の方向を示唆する得がたい指導者として、今日の佐久病院をあらしめた若月院長の足跡をたどり、以下本書の過半をあてて、その特異な資質を分析的に詳述している。長年その仕事ぶりと人柄に接してきた著者らの「若月俊一の精神史」と呼ぶ興味深い部分である。ここでは、いわば若月院長の生死を左右した思想体験、戦争体験を通しての、なお一貫してゆるぎない農民（民衆）への共感が「センチメンタルヒューマニズム」「後衛論」「民衆論」「実践論」という形で浮彫りにされている。このあたり、実践家としての若月院長の幅広い思想形成を追いながら、農村医学の確立という戦後史的にきわめて優れた働きを自在に活写してみせる。

さらに本書は、若月院長のインタナショナルな連帯感と農村医学の国際化の問題に触れている。国際農村医学会、アジア農村医学会などの場で、若月院長が海外の人から寄せられる信頼には驚くべきものがあるが、いまこそ中国、アジア諸国など開発途上の、農業を主とする国々へ農村医学を移転すべきであるという著者らの意見には大賛成である。なお巻末の斗う「オブティミズム」という若月院長の小文は一読に値する。

(坂本 和夫)

〔勁草書房 一九八八年 B六判 二二〇頁 二、〇〇〇円〕

松木明知・花田要一編

『津軽医事文化史料集成―統一』

本書は、昭和六十一年（一九八六）に出版されたものの続編である。前書は、分限帳を主とした史料から医者らの項を採取した史料集で、江戸期の津軽の医師たちの略歴を知る上で貴重なものであった。しかし、私は、残念ながら未見である。続編である本書は、六種の史料を集めたものである。

本書掲載の史料については、「まえがき」および「収録史料解題」により、その意義を知ることができる。編者の一人松木は、若い頃から『蘭学資料研究会研究報告』『日本医史学雑誌』におびただしい論文、資料を投稿、発表してきており、『津軽の医史』（津軽書房）とその続編『北海道の医史』（津軽書房）などを代表とする数多くの医史学関係の著作を発表してきている。

本書の史料の多くは、松木の発表した論文や著書に利用されたものである。「分限元帳嘉永四年改」は前書における史料の欠落を補ったものである。江戸屋敷の近習医と近習詰の医師および弘前の町医の部である。町医の中に、東長町支配の女性鍼医すみや（二人扶持）を発見しており、女医の存在を証する史料としても重要である。

「弘前明治一統誌人名録」は、旧弘前藩士内藤官八郎（一八三二～一九〇二）著一七巻の中の第一三巻「人名録」である。『弘前明治一統誌』は、幕末前後の弘前藩の政治・文化・人事の記録で、「人名録」は幕末から明治に活躍した人物の略伝である。明

治二十五年成稿。掲載史料は、その中から医家を抄出したものである。「伊東春昌の日記」は、代々弘前藩医であった伊東家三代目春昌修徳（天保十三年死去）の日記である。弘前藩医の修業、国内留学の状況を示す史料である。

「桐山正怡編『学本草随筆』」一冊は、町田市の無窮会図書館（日曜開館）所蔵のものである。本書は文政四年成稿と見られ、編者正怡は、桐山正哲の縁者の本草家ではないかと推測されている。「津軽一粒金丹史料」は津軽一粒金丹関係の五つの史料である。史料は、藩医から藩医への製法の伝授を具体的に示す貴重な史料である。編者松木は、津軽一粒金丹について長年追及してきており、その成果を示すものである。

「種痘史関係史料」は、津軽の種痘普及に尽力した弘前藩医唐牛昌運とその弟昌考がつくった啓蒙のための一枚刷（パンフレット）二種と、昌運と種痘普及関係を示す昌運の「種痘履歴書」である。編者は地方史とつながる中央史、中央とつながる地方史であったこそ、時代史を再現できるといっているが、まことに、その通り。しかし、なかなか、そのつながりを正しく結びつけることのむずかしさが歴史研究ではなからうかと思うものである。編者たちのさらなる研究を心から期待するものである。

（矢部 一郎）

〔第八六回日本医史学会会長松木明知 一九八八年 A五判〕

二八九頁 写真一六頁 非売品

松木明知編『森鷗外「渋江抽斎」基礎資料』

弘前藩医渋江抽斎は、森鷗外『渋江抽斎』によって世に知られている。編者の父である故松木明知氏が長年抽斎の研究を続け、その成果が『渋江抽斎人名誌』（昭和五十六年、津軽書房）であった。編者は若年の頃から、父の研究に協力し、さらに、津軽地方の医史学研究の一環として、抽斎関係史料も集めてきた。本書はその成果の一つである。

それ故、本書の紹介の前に、編者の既発表の抽斎関係編著書を紹介しなければならない。『渋江抽斎の研究』（一九八五年、第六回日本医史学会総会事務局）と『直舎伝記抄』（同）である。二書とも、編者の企画での第八六回日本医史学会総会の記念事業によるものである。会長は編者であった。

前書は、抽斎の直系の孫、渋江乙女さんから複写を許された抽斎自筆の「医学館講書一件記録」と「御留守居方留書」によってできたものである。この稿本を復刻するとともに、この稿本により、幕府医学館の動向の一面を明らかにしたのが前書である。後書は、慶応大学医学部北里記念図書館富士川文庫に所蔵される稿本六冊の復刻本である。この稿本は渋江抽斎の自筆本である。後書の解説が編者によってなされており、この稿本は、江戸時代の藩医の宿直日記で現在知られる唯一のものであり、江戸後期の藩医の勤務上の動静をうかがいうる史料であるとしている。二書とも非売品である。

さて、紹介すべきものに戻る。本書は、東大図書館鷗外文庫所蔵の稿本「抽斎年譜」、「抽斎親戚並門人」、「渋江家乗」、「抽斎歿後」、さらに弘前市八木橋武美氏蔵の稿本「渋江保明治元年、三年の日誌」の復刻本である。編者による「収録史料解題」がある。「抽斎年譜」、「抽斎親戚並門人」は抽斎の息子保によるものである。「渋江家乗」は、保による家系図以外は鷗外の筆になるものである。「抽斎歿後」も保によるものである。

鷗外の『渋江抽斎』は文芸上の意義と医史学史料の意義がある。編者は鷗外の作品研究と津軽の医学の歴史についての研究に資するとして、この史料集を発表された。今回紹介したものも、『津軽医事文化史料集成—統一』などから、稔り多い論著が著者によって、また、他の研究者によって発表されることを楽しみにしている。

編者は、最近、弘前大学医学部麻酔科学教授となられた。医学部の教授は、本来の研究と教室の主宰、学生の教育、学部運営など、多忙であり、医史学研究はかなり困難になったと思われる。しかし、いままで、編者は麻酔科学研究のかたわら、精力的に史料の探索、それによる研究と成果の発表を行ってきた。今後の医史学研究も大いに期待できるのではないかと思っている。そして、いままでよりもっと練れて充実した論稿を『日本医史学雑誌』に投稿されることを望むものである。

（矢部 一郎）

〔第八六回日本医史学会会長松木明知 一九八八年 A 五判〕

四七四頁 非売品

### 山下政三著『明治期における脚氣の歴史』

著者は昭和五十八年、『脚氣の歴史—ビタミン発見以前—』という大著を刊行し、四〇〇部に及ぶ膨大な参考文献を縦横に駆使して、独自の立場より明快に整理し、二十世紀初頭にビタミンが発見されるまでの東洋（主として日中兩國）における脚氣の歴史を詳述し、驚異的注目を浴びた。

著者は東大第一内科に在って臨床に従事しつつ、「ビタミンB<sub>1</sub> 欠乏症状の実験的吟味」によって学位を獲得したという、脚氣の専門家である。この書の出版に際し、順天堂大の小川鼎三教授が序文を寄せられてこれを推挙し、次は「明治期における脚氣の歴史」を詳しく正確に書いて欲しいという新しい注文をつけられた。以来著者は六年の歳月を新著に傾倒し、この度も全三七七部の文献を克明に検討し、見事に集大成を試み、期待に応えられたのがすなわちこの『明治期における脚氣の歴史』である。

本書は全八章に分かれている。列挙してみると、(一) 明治天皇の病氣と脚氣、(二) 西南戦役と脚氣の流行、(三) 脚氣病院の設立と近代脚氣研究の発端、(四) 明治初期の脚氣医学、(五) 一般社会の脚氣流行、(六) 海軍の脚氣流行とその対策—高木兼寛、(七) 陸軍の脚氣流行とその対策—石黒忠恵・森林太郎、(八) 日清・日露戦争と脚氣の流行—臨時脚氣病調査会の設立、の八項目について選択された資料を詳細に引用し、懇切な解説を尽くしている。

官立脚氣病院の設立とその報告書については、あたかも当時漢方禁止法令の公布と時を同じくし、漢洋医学闘争に伴う政治的裏面史が混入し、実態不明瞭でとかく暗黒な部分とされていたが、著者はこの点に照明を当て、事実に基づく資料を以て公平な判断を下している。

脚氣病院開設の当初は、担当者間の理解交流面で円滑を欠き、成果があがらなかったが、明治十三年四月における第三報告書によると、漢方側の今村了庵は、自ら洋方薬を試用して漢方薬と比較し、洋方側の佐々木東洋は漢方医学を繙ぎ、脚氣に関する所論を参考とし、漢方の遠田澄庵も自ら洋方側の病理解剖に立会い、その精密さを讃え、薬品試験委員は遠田澄庵の脚氣薬の分析検査を行ったという。漢洋脚氣病院の相互研究態度が円満に報告されている。

著者はこの官立脚氣病院の医学的意義を高く評価し、遠田澄庵の脚氣米因説が、ショイベの脚氣論文によって欧米に紹介され、やがてエイクマンの脚氣米毒説への示唆となり、高木兼寛の海軍兵食改革に連なり、ビタミンの発見へと発展する、その経過について強い意義づけを行っている。著者によって脚氣病院の医学的意義がはじめて解明されたと思われる。

明治十一年日本で設立されたこの脚氣病院は、世界最初の官立病院で、オランダ政府がバタビアに設立した研究所より一〇年早く、しかも画期的漢洋両医学が対等の立場で共同研究を行ったことはすばらしいことであると称賛している。

本書を通覧してとくに印象に残ることは、脚氣病院設立にあた

つて示された英邁なる明治天皇の念願が、見事に成果を収めたという感銘を禁じ得ないことである。

(矢数 道明)

〔東京大学出版会 一九八八年 A五判 五〇七頁 一一、〇〇円〕

H・シッパージェス著 大橋博司・濱中淑彦・波多野和夫・山岸洋訳

『中世の医学—治療と養生の文化史』

本書は Heinrich Schipperges: Der Garten der Gesundheit, Medizin im Mittelalter (Artemis Verlag, München/Zürich, 1985) の全訳である。構成は二〇章(第一章 序、第二章 世界像と図像の世界、第三章 誕生、成長、死、第四章 疫病のパノラマ、第五章 医学的治療、第六章 医学の家、第七章 医学教育の課程、第八章 医療の供給体系、第九章 理性的生活の術、第十章 展望)からなり、内容も中世史料に精通した著者の豊かな学識と深い洞察とに満ちている。

歴史諸科学による中世研究の近年の発展を通して、ヨーロッパ中世像が大きく変貌してきた結果、中世医学研究の重要性も増してきた。とりわけアリエスの登場は中世研究に強い衝撃を与えた。アナール学派から刺激を受けた歴史家たちが引き起こした社会史の活況によって、人々の中世医学史への関心は高まりつつある。しかしながら、わが国においては、中世科学史への高い関心

にもかかわらず、中世医学研究者の層の薄さもあって、中世医学の本格的研究は現在までのところ苦戦を強いられているように思われる。この時期に、ヒルデガルト・フォン・ビンゲン研究をはじめ中世医学研究で大きな成果を挙げたシッパージェスの著作が日本語で読めるようになった意義は大きい。ヨーロッパの中世医学研究の水準の高さを反映した本書を通して、中世医学への理解を深める読者も少なくないであろう。

媒介の時代たる中世は、独自のまとまりのある文化・教養空間をもっている。中世医学は決して現代的な意味での医学ではないが、中世が産み出した諸成果は現代にとっても大きな意味をもっている。たとえば、公衆衛生の分野でも、病院の創設でも、さらに古代において自由学芸から脱落していた医学が大学の成立とともに学部として定着した問題にしても、中世は先駆的役割を果たしている。

著者は、本書を通じて伝統的中世観がもつ偏見の打破に努めている。たとえば、子供、死、性の問題でも、中世には独自の「幼時」は存在せず、それゆえ後世になつてはじめて「子供の発見」が起ったとか、中世には性行為に対する敵視があったとみなす見解に反駁し、そうした偏見は近代の所産にすぎず、事実をむしろ逆であることを中世人に語らせる。

最後に、「訳者あとがき」によれば、本書は、最初は故大橋博司氏が単独に翻訳を進めていたが、氏の急逝後、他の訳者諸氏によって完成されたものとのことである。二次文献である研究書とはいえ、専門用語やラテン語などで日本語の定訳がないものや現



代語に置き換えにくい言葉も少なくないから、訳出にはご苦労も多かったらうと推察される。訳者諸氏のご努力に感謝したい。

(小林 雅夫)

『人文書院 一九八八年 A五判 三二六頁 三、二〇〇円』

ルネ・スムレーニユ著 影山任佐訳

『フィリップ・ピネルの生涯と思想』

医学史上、フランス・イデオログの一人、パリ学派の総帥、精神医学の父などと多くのレッテルを貼られ、シゲリストの『大医学者』の一人にも挙げられているほどの巨星であるフィリップ・ピネルについては、断片的なこととはよく知られているものの、その伝記となるときわめて少ない。レヒラー、シャペール、ジルボーグ、アッカークネヒト、リース、ワイナーらの著作や論文が最近のものとして目につくにすぎない。

ピネルといえは人口に膾炙している話として、ビセートル精神病院で拘束されている精神病者の鎖を解いたという逸話があり、真の精神医学者あるいは博愛主義者としてのピネルの名声を確立させることになったのであるが、実は鎖を外すことを主張したのは看護人のジャン・バブチスト・ピュッサンであり、ピネルの考へではなかったことが指摘され、その逸話はピネル神話であるとされるようになってきた。それも一九七九年のワイナーの論文以来のことであるといえは、ピネルの評伝がいかに限られており、

ピネルがいまなおヴェールに包まれているということがわかるというものである。

数少ない伝記のなかで、名著としての誉れ高く、その後のピネル論の基本となったのがルネ・スムレーニユの“Aliénistes et philanthropes: Les Pinel et les Tuke” (Paris, 1912) やその

スムレーニユはピネルの甥のカシミールの孫にあたり、ピネル一族の一員であることもあって、ピネルに関する著作が多く、前記の代表作の他に、“Les grands aliénistes français: Philippe Pinel, Esquirol, Ferrus, Falret, Voisin, Georget” (Paris, 1894) が知られている。それらの一連のピネルものの原点となるのが、彼の学位論文である“Philippe Pinel et son oeuvre au point de vue de la médecine mentale” (Paris, 1888) である。本訳書は、ピネルの生涯、当時の精神医学の状況、ピネルの業績の三章とピネルの手紙の付録から構成されるこの学位論文の部分訳で、その中の「生涯」と「業績」の二章の翻訳から成る。

ピネルの伝記や業績について十分に知られていないことは本邦においてはさらに深刻で、ピネルの名のみ高く、その実像はほとんど知られていない状況にあるのではないかと評者などは思っているが、そのようなとき、部分訳とはいえ、また内容的には精神医学者としての側面の記述に偏りがちとはいえ、本書のようなピネルに関する基本的な著書が出版されたことは医学史や精神医学史の学問の上で、非常に有意義なことであると思われる。

さらに、一八八八年という一〇〇年前の著作ではあるものの、ピネルの伝記といえは必ず名前の出てくるルネ・スムレーニユ

の、しかもその処女作が日本語で読めるようになったことは喜ばしいことである。いづれ代表作の『ピネルとテュック』も翻訳されることになるのであろうが、その基本的な内容は本書ですでに述べられており、しかも、その後の伝記、たとえレヒラー、シヤベール、ジルボグなど多くの著者たちはスムレーニユの著作に多くを負っていることを考えれば、本書によつてはじめてピネルの実像がわれわれに身近になったといえるであらう。

専門家を含め多くの人に本書の一読を薦めたい。

もっとも、スムレーニユへの批判がないでもない。ピュッサンのことは本書に触れられており、ピネル自身ピュッサンの偉さを繰り返し述べていたといわれている。したがつてたとえ直接には指示をしなかつたとしても、精神病棟の責任者であるからには、ピネルが鎖を切つたという表現には誤りはなく、それを神話ときめつけるのはどうかと評者などは思うが、しかし、ピネル神話といわれる背景には、おそらく、ピネルを美化し、その後の神話形成の素となつたスムレーニユへの批判があるように感じられる。ピュッサン論をしたワイナーは、ピネルの書簡をスムレーニユを含めたピネル一族が私物化していると怨みがましくも述べたことがある。事実はどうであれ、確かに本書を読むに際しては、身内であるスムレーニユの思い入れを考慮しておく必要があるかもしれない。

影山任佐氏の訳は、ところによつて硬さがあり、気になるところもみられたが、総じて読み易く、良心的な翻訳と見受けられた。しかし、訳者あとがきには異論がないわけではない。そこで

は、訳者がフランスのピネルの実家を訪れ、親族に歓待されたこと、レヒラーの伝記本を貸してもらつたこと、シヤベール夫人に面会したことなど訳者の個人的な体験だけが写真入りで述べられている。それはそれで、医学史というよりは逸話として興味のあつた話ではあるが、しかし、やはりここでは個人的な談義だけをすすめるのではなく、著者であるルネ・スムレーニユのことや本書の医学史上での意義について解説をしなければならなかつたのではなからうか。専門書の翻訳というのは、ただ横のものを縦にするのではなく、その書物の医学史上の意義をも明らかにすべく、解説を準備すべきものであると評者は考えるし、まして一〇〇年前のスムレーニユのことを知っている人など読者層にそう多くはないと思うからである。

(松下 正明)

〔中央洋書出版 東京一九八八年 A五判 一二二頁 二、五〇〇円〕